

接続助詞用法の「～べきに」の衰退とその要因

佐伯 暁子

要旨

現代語の接続助詞「に」が助動詞に付接する場合に着目し、その歴史的推移を視野に入れることで、古代語に存在した「～べきに」が衰退した理由を検討する。

現代語において、逆接（当為・常識）を表す「だろうに（でしょうに）」「たろうに」が散見されることから、助動詞に付接する「に」は接続助詞と認めてよい。現代語の逆接（当為・常識）を表す「推量の助動詞「う」+接続助詞「に」を歴史的観点から見ると、「～うに」（「～うずるに」）は「～べきに」の代替形として中世後期に出現する。「～べきに」が「～うに」（「～うずるに」）に交替した要因には、中世後期から近世後期において「判断+推量」を表す場合に「～べきに」が用いられやすいことが挙げられる。一方、主に「判断」を表す「～べきを」はそのままの形式で用いても問題がなく、現代まで用いられ続けている。

1 はじめに

現代語における接続助詞「に」は、普通（1）（2）のような「慣用的な言い方」（『日本文法大辞典』「に（現代語）」阪田雪子）で用いられる。

- （1）思うに、あなたは誤解している。
（『明鏡』（第三版））
- （2）私が考えるに、この案には問題がある。
（『明鏡』（第三版））

しかし、（1）（2）の他にも、「推理するに」（＝（3））「鑑みるに」（＝（4））や「勘案するに」「研究するに」「推察するに」などの例が散見され、「に」は現代語において接続助詞として機能している」（安 2017：68）とする先行研究もある。

- （3）さて、気を取り直して式から推理するに、この答案を書いた人は、A君の速度を毎分xメートル、B君の速度を毎分yメートル、池のまわりの長さをzメートルとにおいて、計算をしたのだらうと思います。

（ハッピーになれる算数 2005：安 2017）

- （4）しかしながら、こうした南北対立の現状を鑑

みるに、流通システムの広域化・標準化は容易でないように思える。

（北米大停電 2004：安 2017）

一方、現代語における接続助詞の「を」については、一般的にその存在が認められていない（天野 2011，加藤 2013で確認されている）。しかしながら、語彙的に固定化した「～べきを」は、逆接の意味を担う形式として用いられる（佐伯 2022）。

- （5）情勢の変化に合わせて予算も変化縮小させるべきを、税金を超えて借金しても、国民も政治家も慢性化して無反応になっているように見受けられる。

（朝日新聞 2012/1/24）（佐伯 2021：9）

- （6）駅の改札で「裏が黒か茶色の切符」と書くべきを「黒と茶色の切符をお持ちの方」とある。

（読売新聞 2000/12/15）（佐伯 2021：11）

佐伯（2022）で行った調査では、「～べきを」の用例は中古から近世においても確認することができた。つまり、「～べきを」は古代語から現代語に至るまで用いられ続けている形式であると考えられる。同様に、佐伯（2022）では「～べきに」も古代語に存在していたことを確認した。表1に佐伯（2022）の調査結果¹⁾、

(7)~(9)に「~べきを」, (10)~(12)に「~べきに」の用例を示す。

表1 中古から近世における接続助詞用法「~べきを」「~べきに」の使用状況 (佐伯 2022を一部編集)

	~べきを	~べきに
中古	151	37
中世前期	20	113
中世後期	2	7 ²⁾
近世前期	8	21
近世後期	5	3

(7)「御服もこの月には脱がせ給ふべきを, 日次なんよろしからざりける。(後略)」(御喪服もこの月にはお脱ぎになるはずですが, 日柄が吉くありませんでした。)

(『源氏物語』藤袴)

(8) 其ノ後思ハク, 「我レモ此ノ苦患ヲ可^{うくべ}愛キヲ, 仏ノ助ケ^{しらし}令知メ給フ也ケリ」ト思テ, (自分もこういう苦しみをうけるはずであったが, 仏が自分を助けて罪の恐ろしさを知らせてくださったのだ)

(『今昔物語集』巻一九・一九)

(9) 付くる心は, 狩り人の入る野には, 鳥の隠れ所もなかるべきを, せめて音に鳴かずは, しばしの隠れ家ともなるべきを, はかなう鳴きて人に知らるることを, 我が心にだに隠れ家はなかりけるといへるなり。(狩人が入る野には鳥の隠れる場所もないが, せめて声を立てて鳴かなければ, しばらくの間の隠れ家ともなるのに, たわいなく鳴いて人に知られる)

(『老のすさみ』(連歌論))

(10) この後の御腹には, 式部卿の宮こそは, 冷泉院の御次に, まづ東宮にもたち給ふべきに, 西宮殿の御婿におはしますによりて, 御弟の次の宮に引き越されさせ給へるほどなどのことども, いとみじくはべり。(式部卿の宮こそ冷泉院の次にまづ東宮にお立ちになられるのが当然だったのに, 西宮殿の婿君でいらっしまったので御弟の次の皇子に東宮の位を飛び越されてしまわれたが,)

(『大鏡』地・右大臣師輔)

(11) 夏ノ事ナレバ, 土葬也ト云ヘドモ, 少モ香ハ可有^{あるべ}キニ, 露其ノ臭キ香無シ。(少しはにおいがするはずなのに, まったく臭気がない。)

(『今昔物語集』巻一二・二四)

(12) 念仏のままにて終らましかば, 行く末も頼もしかるべきに, よしなくおどろかして, (念仏のままに臨終を迎えたならば, 未来も頼もしいことであろうに, つまらないことに目を覚まさせて,) (『とはずがたり』巻一)

表1を見ると, 中古に頻繁に用いられていた「~べきを」は, 中世前期の過渡期を経て, 中世後期には使用されにくくなるのがわかる(この点について, 佐伯(2022)では「連体形+「を」」の用例数のうち接続助詞用法の「~べきを」が占める用例数も調査し詳細に記述した)。しかし, 「~べきを」は衰退するわけではなく, 近世後期以降現在まで細々と用いられている。この「~べきを」の様相と, 「~べきに」の用例が中世前期に多数確認できること, 現代語でも接続助詞「に」の存在が認められることを考え合わせると, 「~べきに」が現代語に残存していてもよさそうである。しかしながら, 「~べきに」は現代語では用いられない。なぜ, 「~べきに」は現存しないのだろうか。

(13) (前略) 穩便の義を存じて遜順の詞を使ふべきに, 俣野, 広量の辞を余し, たちまちに二番まで恥辱に及ぶこそ悲しけれ。(穩便に振る舞うことを考えてへりくだった言葉を使うべきであるのに, 俣野は尊大な言葉を必要以上に使い, たちまちに二度までも恥辱を受けたのは哀れなことだ。)(『曾我物語』巻一)

(14) へりくだった言葉を使う{*べきに/べきを}, 俣野は尊大な言葉を使った。

本稿では, 現代語の接続助詞「に」が助動詞に接続する場合に着目し, その歴史的推移を視野に入れることで, 古代語に存在した「~べきに」が衰退した理由を明らかにする。

2 先行研究

現代語における接続助詞「に」に関する先行研究として, まず国立国語研究所(1951)を確認しておく。国立国語研究所(1951)では, ①前おきを述べて本論の内容の叙述に接続させる, ②逆説条件, の2つの用法が示され, ①の用例として(15)のような「要するに」と「思うに」, ②の用例として(16)が挙げられている。

(15) しかし、一枚皮を剥ぐと、要するに、公債、
地方債へのシワヨセの代りに、直接人間生産
力や民族産業、中小企業、農業等へのシワヨ
セになっていることがわかるであろう。

(エコ, 5. 11, 10) (国立国語研究所 1951: 151)

(16) 「人もあろうにあの乱暴ものにタテをつくとは、
君もよっぽど度胸のある男だね」

(国立国語研究所 1951: 212)

同様に、『日本文法大辞典』では「慣用的な言い方
でしか用いられない」とした上で、①動詞の終止形に
ついて、後に続く叙述内容の、よって来たる心的態度
などを提示し、このような条件においてであると限定
を加えるもの、②「もあろうに」の形で逆接的に用い
られるもの、が示されている。このうち①については
(17) の用例が挙げられ、「要するに」「察するに」
「考えてみるに」などの形で用いられることが指摘
されている。②については、(18) (19) の用例が挙げ
られている。

(17) 思うに、これは彼らの計画的な犯行である。

(『日本文法大辞典』)

(18) 折りもあろうに悪い時にやってきた。

(『日本文法大辞典』)

(19) 場所もあろうにこんな所で言わなくてもいい
じゃないか。

(『日本文法大辞典』)

以上の先行研究では、動詞終止形に接続する「に」は
前置き、「もあろうに」の形式に現れる「に」は逆接
と捉えられている。

一方、安 (2017) は、先行研究で指摘された点につ
いて、(20) のように問題提起し考察を行っている。

(20) a. 京極 (1987) で「近世においても接続助
詞「に」の使用は見られるが、近代の口
語文になると、「要するに」「思うに」な
どの慣用句の中に名残をとどめるに過ぎ
なくなった」と記述されるが、接続助詞
「に」は衰退していると言えるのか。

b. 『デジタル大辞泉』『明鏡』(第二版) で
「要するに」「思うに」が副詞とされたり、
国立国語研究所 (1951) で「要するに」
と「思うに」が同じ用法として扱われたり
するが、「要するに」と「思うに」に
相違はないのか。

考察の結果、動詞終止形に接続する「に」には、①接
続助詞の「に」:「勘案するに」類、②副詞節マーカ
ーの「に」:「思うに」類、③副詞語尾の「に」:「要する
に」, の3種があることを指摘している。そして、①
について「「に」が思考や発言の動詞の後ろに付いて、
前節の事態を踏まえてこれに対する話者の推量・推測
などを後節で述べる」(安 2017: 60) といった「動詞
や用法に制限はあるものの、「に」は現代語において
接続助詞として機能している」(安 2017: 68) と述べて
いる。

以上のような先行研究の蓄積により、現代語の接続
助詞「に」について多くのことが明らかになっている。
とりわけ安 (2017) は重要で、接続助詞「に」が動詞
終止形に接続する場合について分析が深められている。
しかし、接続助詞「に」が助動詞に接続する場合につ
いては、国立国語研究所 (1951) や『日本文法大辞典』
に「{折り/こと/場所/人} もあろうに」という一
部の形式が取り上げられるだけである³⁾ (『明鏡』(第
三版) には「まいに」の形式も取り上げられている⁴⁾)。
また、用法としても逆接という点が示されるだけであ
る。本稿では、現代語の接続助詞「に」が助動詞に接
続する場合を対象とし、その使用実態を明らかにする。
そして、現代語に見られる「助動詞+接続助詞「に」」
の歴史的観点からの調査・分析を踏まえ、「～べきに」
の衰退理由について考察を試みる。

3 現代語における「助動詞+接続助詞「に」」 の使用実態

第2節でも見たように、「動詞+接続助詞「に」」は
現存すると考えられる。では、「助動詞+接続助詞
「に」」には「～もあろうに」「～まいに」以外の形式
は見られないのだろうか。まずは、『現代日本語書き
言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) で「助動詞+接
続助詞「に」」について調査し、現代語における様相
を観察する(表2)⁵⁾。

表2に示した、「に」の後続に「と」が現れる場合、
後部が省略される場合は、「逆接条件を表す」用法の
「下の句を省略したところから終助詞的に用い」(『日
本国語大辞典』) られたものと考えられる。

表2 BCCWJにおける「助動詞+接続助詞「に」」の用例数

だろうに	83
でしょうに	15
たろうに	15
ますに	18
られるに	2
助動詞+にと	39
助動詞+に。	257
合計	429

- (21) 米内さん、もっともつと積る思いが山ほどあるだろうにと、聞く者皆が思ったという。
(BCCWJ: 阿川弘之『米内光政』)
- (22) やがては腐葉土となって、豊かな自然の恵みをもたらすだろうに。
(BCCWJ: 檀ふみ『まだふみもみず』)

これらを除くと、BCCWJによる現代語の「助動詞+接続助詞「に」」の用例数は全133例となる。ただし、助動詞「ます」に「に」が付接する「～ますに」(「いまから回想してみますに、おそらく董作賓という人が出てこなかったら、甲骨文研究というものは、今のように入歩したかどうかかわからない。」(BCCWJ: 貝塚茂樹『最終講義』)など)は、安(2017)で指摘される「動詞+接続助詞「に」」の動詞が丁寧形になった形式であり、「動詞+接続助詞「に」」に準じるものとみなすことができる。このように見てくると、接続助詞「に」が付接する助動詞は、「だろう(でしょう)」「たろう」に集中していることがわかる(133例中113例で約85%を占める)。これらは、断定の助動詞「だ(です)」, 過去の助動詞「た」に推量の助動詞「う」が付接したものである。つまり、現代語において接続助詞「に」は推量の助動詞「う」に付接しやすいと言えることができる。

ここで重要なのは、「推量の助動詞「う」+接続助詞「に」」が逆接(当為・常識)を表すという点である。

- (23) そのあいだ、さち子は、丹子と兄のやりとりが耳に入っているだろうに、顔色一つ変えず悠々とパンをトースターに入れ、テレビを見ながらバターをたっぷりつけ、紅茶を飲む。
(BCCWJ: 田辺聖子『薔薇の雨』)
- (24) 学生生活の週末には楽しいことも沢山あるだろうに、彼は熱心に母親を手伝っていた。
(BCCWJ: 高樹のぶ子『これは懺悔ではなく』)

- (25) いろんな寂しいこともあったでしょうに、よく五年間も頑張れたものだと、少し自分の娘を尊敬してしまいました。

(BCCWJ: 宮本輝『宮本輝全集』)

- (26) 「もう一度、おたきちゃんの顔見たくてたまんなかったたろうに、振り向かなかったな。
(後略)」 (BCCWJ: 原田康子『海霧』)

(23)は「丹子と兄のやりとりが聞こえているはずなのに、顔色を変えない」、(25)は「寂しいこともあったはずなのに、頑張れた」と解釈でき、当為・常識を表す逆接となっている。

なお、先行研究で挙げられた「もあろうに」「まいに」はBCCWJでは用例が得られなかったが、『日本国語大辞典』に「もあろうに」を用いた慣用的な言い方が複数取り上げられている。以下に、見出し語と意味を挙げる。

- (27) おりもあろうに:

他にいくらでも機会があるだろうに。よりによってもっとも都合の悪いときに。

こともあろうに: よりによって。

ところもあろうに: 他によいところもあるだろうに。よりによって。ところこそあれ。

ひとあろうに: 他にいくらでも人はいるのに。よりによって。

これらは「{おり/こと/ところ/ひと}+もあろうに」の形式で用いられ、いずれも「よりによって」という意味を表す慣用表現である。(23)~(26)の逆接(当為・常識)を表す「推量の助動詞「う」+接続助詞「に」」とは異なるものと捉えられよう。ただし、「もあろうに」にはこのような慣用表現だけでなく、(23)~(26)と同じタイプの例も見られる。

- (28) 悪夢なら覚める時もあろうに、現実にあのようなことになろうとは……この寒空に……思いははせるばかりである。

(読売新聞 1995年2月12日)

- (29) 通称ハマコー氏には「ヤジ將軍」の異名がある。(中略)「やんちゃ馬」がなまってヤジ馬になったとする説があるが、それならまだ救いもあろうに、このご仁のは敵意むき出した。
(読売新聞 1988年2月14日)

(28) は「悪夢なら覚める時もあるはずなのに」、(29) は「当然救いがあるけれども」という意味であり、逆接（当為・常識）を表す。また、逆接（当為・常識）を表す「～まいに」の用例も新聞で拾うことができる。

(30) J R北海道の本社（札幌市）には「工務部」という部署が存在するらしい。線路の異常を見つけても補修せずに放置するのだからそんな部署は要るまいに、どうしてあるのだろう。（読売新聞2013年9月25日）

以上の (23)～(26), (28)～(30) の「推量の助動詞「う」「まい」+接続助詞「に」」が逆接（当為・常識）を表すのは、助動詞「う」「まい」の当然の意味によるものである。つまり、「う」「まい」で当然を表し「に」で逆接を表している。

この構造は、古代語の「～べきに」の「べし」が当然を表し「に」が逆接を表すのと同じである。また、「～べきに」が逆接（当為・常識）を表すことは、先に挙げた (10)～(12) を見ても明らかである。つまり、古代語の「～べきに」が表していた意味を現代語では「～うに」が表している可能性がある。さらに、山口 (2000) では、「助動詞「べし」は、中世になると文語化して、口語の世界では次第に衰退し、「中世末期口語の世界で、著しく衰退」したこと、「べし」の代表的な代替語は「う」「うず」であることが指摘されている（山田 2001にも指摘がある）⁶⁾。これらを考え合わせると、「～べきに」から「～うに」「～うずるに」への交替があったことが推測される。そこで次節では、歴史的観点から「～うに」「～うずるに」の様相を見る。なお、「～まいに」は「～まじきに」と関係があると考えられるが、「～うに」「～うずるに」と一括して扱うには問題があるので、本稿では「～うに」「～

うずるに」のみを対象とする。

4 「～うに」「～うずるに」の歴史

『日本語歴史コーパス』（以下、CHJ）を調査し（キーに語彙素「う」「むず」（助動詞）、活用形「意志推量形」、後方共起キーから1語に語彙素「に」（接続助詞）、検索対象全て）、表3の結果を得た（用例が確認できた資料とその用例数のみを示す。全用例数のうち、逆接（当為・常識）を表す用例数も示しておく）。表3を見ると、逆接（当為・常識）を表す「～うに」「～うずるに」は『天草版平家物語』に初めて出現することが見て取れる。中世後期の具体例を挙げておく。

(31) 真に存生の時ならば、大納言入道殿こそ如何にとも仰せられうに、生を隔つる習いほど恨めしい事は無い。

（『天草版平家物語』巻一・一一
40-天平 1592_01011, 7480⁷⁾）

(32) 「そなたはとしもわかし、ことにうつくしうむまれついて、いつかたからも、えんをむすびたがる人もあまたあらふに、いままでごけいをおたちやる事、きどくなど云て、せけんからも申、

（『虎明本狂言集』寝替
40-虎明 1642_08060, 5080）

(33) 既に十二三に成らうずる者が、今は礼儀を存じ知ってこそ振る舞うずるに、斯様に尾籠を現じて清盛の悪名を立つる事、不孝の至りぢゃ。

（『天草版平家物語』巻一・二
40-天平 1592_01002, 17940）

(34) Esopo さえも有るならば、この不審を容易う開き、我が誉をも輝かし、国の知略をも上げうずるに、悔ゆるに甲斐無い越度をしたと御

表3 「うに（ふに／ろに）」「うずるに（ふずるに／むずるに／んずるに）」の使用状況

		うに (ふに／ろに)	うずるに (ふずるに／むずるに／んずるに)	逆接（当為・常識）	
				うに (ふに)	うずるに
中世 前期	今昔物語集		1		
	宇治拾遺物語		1		
	平治物語		1		
中世 後期	天草版平家	5	10	1	4
	天草版伊曾保		2		1
	虎明本狂言	23	2	6	
近世	洒落本	5			
	人情本	8		2	

涙を流させらるれば、

『天草版伊曾保物語』Esopoの生涯の事
40-天伊 1593_00002, 12155)

(31)は、「父である大納言殿が生きている時なら「どうした」とも言われるに違いないが、今生と後生とに隔たって会うことのできない、この世の習いほど悲しいものはない」と解釈でき、「～うに」が逆接(当為・常識)を表している。(33)は、「十二、三歳になろうとする者は、礼儀を心得て振る舞うべきなのに、無礼をはたらいて清盛の悪い評判を立てる」ということで、「～うずるに」が当為・常識を表す逆接となっている。

以上のように、「～うに」「～うずるに」が逆接(当為・常識)を表していることを踏まえると、「べし」がその代替形式である「う」「うず」に置き換わるのと連動して、逆接(当為・常識)を表す「～べきに」が「～うに」「～うずるに」へと置き換わったと考えられる。「～うに」「～うずるに」の出現時期と「～べきに」の勢力が弱まる時期(表1参照)がいずれも中世後期で一致していることから、「～うに」「～うずるに」の出現に伴い「～べきに」が次第に衰退していったと考えられる。ただし、「うず」は近世以降に急速に衰える(『日本国語大辞典』)ため、「～うずるに」も衰退していったと推測できる。一方で、「～うに」は現在まで引き続き用いられている。

ここで考えなければならないのが、逆接(当為・常識)を表す「～べきを」は形を変えることなく現存しているにもかかわらず、なぜ「～べきに」は「～うに」「～うずるに」へと形式が置き換わったのか、という点である。これには、「判断+推量」を表す場合に「～べきを」より「～べきに」の方が用いられやすかったことが関わっている。表4は、表1に示した「～べきを」「～べきに」の用例を「べし」の表す意味によって「判断」「判断+推量」「可能」に分けたものである。例えば、先に挙げた「～べきに」の用例の場合、(35)が「判断」、(36)が「判断+推量」を表している。

(35) 夏ノ事ナレバ、土葬也ト云ヘドモ、少モ香ハ
可有^{あるべ}キニ、露其ノ臭キ香無シ。(少しはにおいがするはずなのに、まったく臭気がない。)

(11)の再掲)

(36) 念仏のままにて終らましかば、行く末も頼も
しかる^{べきに}、よしなくおどろかして、(念
仏のままに臨終を迎えたならば、未来も頼も

表4 中古から近世における接続助詞用法「～べきを」「～べきに」の用法ごとの用例数

	～べきを			～べきに		
	判断	判断 + 推量	可能	判断	判断 + 推量	可能
中古	111	37	3	30	7	0
中世 前期	5	14	1	82	29	2
中世 後期	2	0	0	2	5	0
近世 前期	5	3	0	10	11	0
近世 後期	4	1	0	2	1	0

しいことであろうに、つまらないことに目を
覚まさせて、) (12)の再掲)

表4を見ると、「～うに」「～うずるに」が出現する中世後期から近世後期において、「～べきを」「～べきに」とともに「判断」「判断+推量」を表すが、「判断+推量」を表す場合は「～べきに」が用いられやすいことがわかる(「～べきを」合計4例:「～べきに」合計17例)。山口(2000:59)で、「中世の「べし」が「適当・当為を表す観念的な表示性が強ま」ったと指摘されることを踏まえると、「判断+推量」の意味分野も担う形式として「～べきに」の「べし」が代替形式である「う」「うず」に置き換えられたということは十分に考えられる。実際、中世後期、近世に見られる逆接(当為・常識)を表す「～うに」「～うずるに」全14例(表3参照)のうち5例は、「判断+推量」を表している((31)(34)など)⁸⁾。反対に、主に「判断」を表す「～べきを」の「べし」はそのままの形式で用いても問題がなく、代替形式に置き換えられることなく用いられ続けたのではないかと考えられる。

5 まとめ

以上、本稿では現代語に見られる「助動詞+接続助詞「に」」を歴史的観点から考察することで、「～べきに」の衰退理由を明らかにしようと試みた。本稿で述べたことをまとめておく。

(37) 現代語の接続助詞「に」は、推量の助動詞「う」に付接した「だろうに(でしように)」「たろうに」の形式で用いられやすい。これらは、逆接(当為・常識)を表す。

- (38) 『天草版平家物語』に初めて出現する「～うに」「～うずるに」は、逆接(当為・常識)を表す。このことと、古代語の「～べきに」が逆接(当為・常識)を表すこと、「べし」が中世末期の口語で著しく衰退し「う」「うず」に置き換わったことを考え合わせると、「～べきに」の代替形として逆接(当為・常識)を表す「～うに」「～うずるに」が中世後期に出現したと考えられる。
- (39) 逆接(当為・常識)を表す「～べきに」は「～うに」「～うずるに」に交替することにより次第に衰退したと考えられるのに対し、「～べきを」は古代語から現代語まで用いられ続けている。
- (40) 「～べきに」が「～うに」「～うずるに」へと交替していったのは、中世後期から近世後期において、「判断+推量」を表す場合に「～べきに」が用いられやすいことが関わっている可能性が高い。一方、主に「判断」を表す「～べきを」はそのままの形式で用いても問題がなく、現代まで用いられ続けているのではないかと考えられる。

先行研究では、助動詞に付接する接続助詞「に」の逆接を表す用法について、「{おり/こと/ところ/ひと}+もあろうに」という慣用表現の議論に留まっていた。本稿では、逆接(当為・常識)を表す形式として「だるうに(でしように)」「たるうに」が多用されることを示した。このことは、接続助詞「に」が助動詞に付接する場合においても、現代語の接続助詞「に」の存在が認められることを示している。このような、現代語に残存する接続助詞「に」「を」の観点を取り入れることにより、逆接(当為・常識)を表す「～べきを」は衰退しないのに対し、「～べきに」が衰退する理由を無理なく説明することができた。今後は、逆接を表す接続助詞「が」「も」「ど」「ども」なども視野に入れて、逆接を表す接続助詞の歴史的変遷を考えていきたい。

注

- 1) 調査資料については論文末を参照。
- 2) 佐伯(2022)の用例数を修正した。
- 3) 『大辞林』(第四版)にも、意味・用法について次のような記述がある。
 - ・(「…もあろうに」の形で)逆接的な意を表すのに用いる。「こともあろうに、飲酒運転するとは」

4) 『明鏡』(第三版)には、意味・用法について次のように記述されている。

- ・①〈「…ようにも」「…まいに」などの形で〉逆接を表す。「進もうにも風が強くて歩けない」「そんなことはあるまいに」

なお、「進もうにも風が強くて歩けない」は、「V-ようにもV-れない」という形式で用いられ「…しようと思ってもできない」という意味を表す(グループ・ジャマシイ 1998)。「に」に「も」が付接する、後続に否定が現れる、という制限があり、固定化した形式である。

- 5) 語彙素「に」(接続助詞)、前方共起キーから1語「助動詞」で検索すると、463例得られる。ただし、「すべては時節にござりまするに、当今、上総介さまはもはや尾張一円にて並ぶ者なき強者にござりまする。(後略)」(BCCWJ:津本陽『下天は夢か』)のような「まする+に」5例、「(前略)われらにかぎりはないが我らは無限だに、安脇の判断で直されている。」(BCCWJ:鴨しれん『グリーンボール』)のような「だ+に」2例、「かかはりなき過去を過去とし嘆かむに「三十を越えし無名のフローベール」」(BCCWJ:上田三四二『増補版現代短歌全集』)のような「む+に」1例は、現代語の例とは見なしにくいので、用例数には含めない。その他、誤分析も26例見られた。以上の34例を除いた429例が表2の合計数である。
- 6) 山口(2000)では、当為を表す連体形「べい」は『天草版平家物語』に残存することが指摘されているが、「～べいを」「～べいに」の用例は中世後期以降見られなかった。
- 7) CHJ から引用する場合は、サンプルIDと開始位置を示す。
- 8) 残りの9例は「判断」を表す((32)(33)など)。つまり、「～べきに」が「判断」「判断+推量」を表していたのを、「～うに」「～うずるに」がそのまま引き継いだと考えられる。

参考文献

- 天野みどり(2011)「接続助詞的なヲの文―「やろうとするのを手を振った」―」『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院
- 安祥希(2017)「現代日本語における助詞「に」の研究―並立助詞・接続助詞・複合辞の「に」を中心に―」筑波大学博士論文
- 加藤重広(2013)「対象格と場所格の連続性」『日本語統語特性論』北海道大学出版会
- 京極興一(1987)「接続助詞「に」「を」「が」の成立と展開」山口明穂(編)『国文法講座3 古典解釈と文法』明治書院
- グループ・ジャマシイ(編著)(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所(1951)『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版
- 佐伯暁子(2021)「現代語における接続助詞用法のベキヲについて」『甲南大学紀要 文学編』171

佐伯暁子 (2022) 「接続助詞用法の「～べきを」の推移」
『日本語の研究』18-2
山口堯二 (2000) 「中世末期口語における「べし」の後
身—『天草版平家物語』の訳語による—」『文学部論
集』84
山田潔 (2001) 『玉塵抄の語法』清文堂

辞書類

『大辞林』(第四版) (2019) 三省堂
『デジタル大辞泉』ジャパンナレッジ
<https://japanknowledge.com> (2023年9月14日確認)
『日本国語大辞典』(第二版) (2001) 小学館
『日本文法大辞典』(1971) 明治書院
『明鏡』(第二版) (第三版) (2010, 2021) 大修館書店

調査資料

竹取物語・伊勢物語・土佐日記・大和物語・平中物語・
蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日
記・紫式部日記・堤中納言物語・更級日記・大鏡・讃岐
典侍日記・今昔物語集・方丈記・宇治拾遺物語・十訓
抄・徒然草・虎明本狂言集・天草版伊曾保物語・天草版
平家物語・近松浄瑠璃24作品・洒落本10作品 (以上, 国
立国語研究所 (2021) 『日本語歴史コーパス』バージョ
ン 2021. 3) / 宇津保物語・栄花物語・夜の寝覚・浜松中

納言物語・狭衣物語・とりかへばや物語・松浦宮物語・
無名草子・正法眼蔵随聞記・平治物語・弁内侍日記・と
はずがたり・曾我物語・太平記・連歌論 5 作品・能楽論
6 作品・仮名草子 5 作品・松尾芭蕉紀行日記 6 作品・西
鶴浮世草子 13 作品・読本 3 作品 (西山物語・雨月物語・
春雨物語)・人情本 1 作品 (春告鳥) (以上, ネットアド
バンス社「Japan Knowledge Lib」) / 平家物語 (覚一
本)・御伽草子 28 作品・仮名草子 4 作品 (恨の介・竹
斎・仁勢物語・伊曾保物語)・嘶本 2 作品 (きのふはけ
ふの物語・軽口御前男)・西鶴浮世草子 1 作品 (西鶴織
留)・浄瑠璃 1 作品 (八百屋お七)・歌舞伎 2 作品 (幼稚
子敵討・韓人漢文手管始)・浄瑠璃 3 作品 (新版歌祭
文・鎌倉三代記・伽羅先代萩)・嘶本 4 作品 (鹿の子
餅・聞上手・鯛の味噌津・無事志有意)・洒落本 8 作
品・滑稽本 2 作品 (東海道中膝栗毛・浮世風呂)・歌舞
伎 3 作品・人情本 2 作品 (春色梅児誉美・春色辰巳園)
(以上, 国文学研究資料館「日本古典文学大系本文デー
タベース」) / 平家物語 (延慶本) (荒山慶一氏によるテ
キストデータ) 以上, 佐伯 (2022) 調査資料
国立国語研究所 (2018) 『現代日本語書き言葉均衡コー
パス』バージョン 1.1 / 国立国語研究所 (2023) 『日本語
歴史コーパス』バージョン 2023. 3 / 読売新聞社「ヨミ
ダス歴史館」